

# 大法輪

昭和9年9月28日第三種郵便物認可（毎月1回1日発行）  
平成30年3月1日発行 第85巻3号

## 特集Ⅱ 今さら聞けない お寺と法事の疑問に答えます

【僧侶についての疑問】 どうしていくつも宗派があるの？／髪を伸ばしてはいけないの？ほか  
【お寺についての疑問】 門に仁王がいるわけは？／ご本尊って誰？ほか  
【仏像についての疑問】 仏像を拝むとは？／秘仏とは何が秘密なの？ほか  
【仏事についての疑問】 戒名をつける理由は？／数珠を持つのは何のため？ほか  
〈追悼〉奈良康明先生 | 西村恵信 / 〈講演〉ほほえみと愛の言葉を | 青山俊董

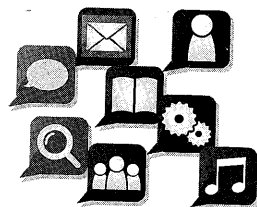


椿 小川佳浩

# お寺さん、出番です!

〔後編〕

## 日本人の美德と感謝の精神を世界へ



すぐれ けいこ  
**勝 桂子**

行政書士・葬祭カウンセラー

前号では、名刹の法話のようなありがたいお話が、悩み苦しみを抱える現役世代や若い人たちへひろまるにはどうしたらよいのかをお話ししました。欧米諸国では、中高齢の人々はいまも週に一度、教会へ通う人が多数であるため、健康を害したり貧困に陥ったりしたとき何ら

族は繁栄するから攻め滅ぼすことはできない」とおっしゃいました。

### すり減る美德を引き留める

このエピソードを久しぶりに思い出して私は、ハッと思いました。日本も、少し前までは欧米人から見ると「滅ぼすに惜しい国」であったはずではないかと。

「おかげさま」、「ありがとうございます」、「いただきます」と口々に言い、互いを敬い譲り合い、大災害になってもパニックや暴動に陥らない国。通りすがりの買い物客が、地震で落下した商品を棚へ戻してゆく姿を見て、海外の人たちは「信じられない」と称賛しました。またサッカーのワールドカップで、自国が負けているのにヤケになったりせず、出したゴミを袋に入れて持ち帰る日本人サポーターに、やはり諸外国の人たちが驚きました。

こうした精神の根幹に、仏教による慈悲の教えや、なにごともお天道さまのお蔭と考える農耕民族の思考が生きていると思います。あまり他民族から蹂躪されてこなかった歴史も幸いしているでしょう。

かのサポートの手が伸びますが、日本では、隣近所とのつきあいで、「お茶・食事をともにしたり相談したりする」、あるいは「病気のとき頼れる人がいる」と答えた人の割合は最下位。そこで日本でも、お寺が欧米の教会と同様の役割を担ってゆけば、「困ったことがあれば、まず寺へ相談」という戦前のような気運が戻ってくるのではないかという提案をいたしました。

今回は、昨今懸念される国家の危難に際し、一ヶ寺一ヶ寺が具体的に、何をどう発信してゆけばよいのかを考えてみたいと思います。

拙著『心が軽くなる仏教とのつきあいかた』（啓文社書房）でも紹介しましたが、「ブツダ最後の旅」のヴァンジ族は滅ぼせないという話（七不退法）を思い出してください。商売が盛んで栄えているヴァンジ人の国を討とうとする王が釈尊に意見を求めたとき、釈尊は「当地では、共同して、なんでも話し合いで決め、旧来の法を大事にし、古老を敬い、婦女・童女を暴力で連れ出さず、部族の靈域を敬い、尊敬されるべき修行者たちに保護と支持を与えている。これらが守られている限りヴァンジ

しかし残念ながら、そうした美德もここ数年、かなりのスピードですり減っていつていっているように感じます。

都市部の満員電車では、中ほどがすいているのに、詰めずに踏ん張る人が増えています。入口付近がギュー詰めのなにも、中ほどのボックス席はがらで荷物を置いている人までいる、という画像が、先日もインターネット上で紹介されていました。そのコメントによれば、東京や大阪より、むしろ北海道や九州で、そうした様子が目立つとのことでした（東京・大阪ではさすがに通勤時は混みすぎるので、空席に荷物を置いたりできないため）。七人掛けの席に六人でまばらに座り、混雑してきてもいつこうに詰めない光景なども、ひんぱんに見かけるようになりました。

情報に追いつき追い越される激流のなかで、多くの人

が自分の足をふんばって立っていることに精いっぱいとなり、隣人を思いやったりいたわったりする余力を失くしているという結果なのかもしれません。

ある美德のところが消滅してしまうのを瀬戸際にてひきとめ、培い直してゆくことではないかと思うのです。

人口が減ったぶんの労働力をまかなおうと、政府はインバウンド政策に力を注いでおり、足りない労働力を海外からの技能実習生や移民で補填することに必死です。先述したとおり、この国の美德は、神仏習合した感謝のところでほぼ統一されてきたことにも大きく起因しています。そこでさまざまな価値観を持った外国人が新たに増えるとなると、治安がよくなるのでは、と眉をひそめる人もいます。しかし、遣唐使とともに青い目の西方の人たちも来日していた飛鳥時代などを想起すれば、私には、この国はかなりインターナショナルであったようにも思えるのです。

外国人向けの坐禅会や、仏教・文化教室 (Class on Buddhism and Japanese Culture) を定期的に催している臨済宗僧侶のお寺では、ムスリムやクリスチャンからも供養を頼まれると聞きます。たとえば祖国で親族が亡くなったとき、彼らは神と契約しているのです、亡くなった親族が天国へいけることに疑いはないわけです。けれども、

は、水や土地の争いに民族の相違や信仰の違いが取って付けられたものです。いま日本の伝統仏教僧侶は、わが宗派の教えありきから脱却し、世界へ向けて「他を排斥しない教えのありかた」を説くべきと思います。



お寺を地域の学びの場にしていくとスタートした取り組みをご紹介します。「まちのお寺の学校」(運営: 一般社団法人寺子屋アツダ) は、お寺を舞台に、教えた人と学びたい人がつながれるサイトです。ココロとカラダの「自然と伝統」遊びとアート、まちと暮らしという四つの視点で、ヨガ講師・音楽家・芸術家・落語家・僧侶・教育者・医療関係者・まちづくり活動家など多彩なパートナー講師がパートナー寺院と共に活動し、地域の人々に「よりよく生きるための有意義な時間」を提供しています。私もアンバサダーとして、寺子屋学などのコンテンツを執筆していく予定です。(勝)

<http://www.machiteranet>

ぽっかりと胸に穴があいたような気持ちはどうにもできないので、「和尚さん、お願いです、供養してください」と寺を訪れるのだそうです。ご住職はこのように説明されています。

「読経を依頼する欧米のかたは、ご供養と、宗となる教え(信仰)を分けて考えてらっしゃいます。仏教は契約の宗教ではないので、どなたでもご供養することができます。仏教は、区別はしても差別はしない宗教ですので、この地で供養をすれば、あなたがたの契約した神さまも認めてくださるでしょう、と説明します。なぜなら日本では、宝船に乗った七福神のように、外国の神さまも含め古来からあらゆる神さまを尊重し共存してきた歴史があるからです」

この僧侶のエピソードからは、日本仏教の行く末は暗澹どころか無限にひろがっているように、私には感じられるのです。

そもそも仏教は一神教と異なり、それぞれの土地の土着の信仰と融合しながらひろまってきました。とかく宗教は戦争につながると誤解されますが、宗教戦争の多く

そして国内に移民が増えてゆくに際しても揺らぐことなく、八百万神信仰と仏教とをなじませてしまった東の果てのこの国へ来たなら、「どんな信仰を持つ人も礼儀正しくなってしまう国」をめざすべく、仏の教えをひろめてゆけばよいのではないのでしょうか。

### 老病死苦は充満している

そもそもこの国は、ミサイルの恐怖が走る以前、はたして平和だったのでしょうか。

私の周辺には自死対策に奔走する僧侶が多数いらつしやいます。年間の自死者数は、三万人を切るようにはなりませんが、警視庁発表で二万一千人(平成二十八年)。一説に、遺書がなければ「変死」と記録され自死者にはカウントされないため、実質の自死者数はこの何倍もいるという話もあります。

また政府が閣議決定した二〇一七年版の自殺対策白書によると、十五〜三九歳の死因は、他の主要国においては事故死のほうが多いのに、日本では事故やがんを上回って自殺が一位。これについて、「国際的に見ても深刻」

と指摘しています（二〇一七年五月三〇日付、朝日新聞デジタル）。

つまり、景気回復によって中高年の自死は減少して全体の数は減ったのですが、十代〜三十代の若年層に限ると一九九〇年代以降、右肩上がりが増え、近年もほぼ横ばいで、ロシア、韓国と並んでトップ・スリーに入っているのです（WHO死亡データベース）等より厚生労働省自殺対策推進室が作成した調査最新年の資料による）。

たとえば海外のコンサートホールなどでテロ事件が起こり、「三〇人が死亡した」などという報道があれば、多くの日本人は亡くなったかたを悼むと同時に、「テロのない国にいてよかった」とほっと胸を撫でおろすでしょう。しかしこの国では、三六五日で割ればいまだ毎日六〇人近くが将来に希望を持たずに、自死という名の自爆テロで命を絶っているのです。この小さな島国は、ミサイルに直撃される以前から、毎日六十人規模のテロが起きていたも同然の国なのです。

このような状況で、各宗教法人が安全なお山の頂<sup>いただき</sup>で、「平和こそ大切」「武力反対!」と叫んで、どれくらい人々

の心に響くのでしょうか。

### 平和を叫ぶより、説得力ある方法を

冒頭の「七不退法」を思い起こせば、国防を望むとき、「戦争反対!」と直接的に叫ぶ必要はないのかもしれない。

もとより、何に対しても「反対!」とか「絶対いけない」と叫ぶことはせず、冷静に持論を述べ、相手に考える機会をもうけるのが釈尊の手法でした。武器を持ちたいと主張する政府に、いくら「やめなさい!」と叫んだところで、武器がなくとも国防できるという確固たる代案を示さないかぎり、暖簾<sup>のれん</sup>に腕押しでしょう。また国民も、武器がなくても安心できる道を示さなければ、賛同してくれないでしょう。

ヴァッジ族の話になぞらえるなら、「これほど礼儀正しい国民を滅ぼしてはならない」と諸外国から思ってもらえる国にしてゆく努力を、全国のお寺が促してゆくならば、兵力を増強しなくても皆が安心できる社会をつくることはできるはずと信じています。

先日、曹洞宗の知人僧侶からこんな話をうかがいました。アジアからの旅行者向けに、精進料理をいただく作法と坐禅の手ほどきをする催しがあったのだそうです。催しが終わると彼らの所作は一変し、お辞儀をして丁寧に箸を置き、一礼して立ち去るようになったということでした。

このエピソードのように、適切な情報提供をしてゆけば、伝わるものは伝わります。異国の人に対し、外なる人々と緊張してしまうのは島国にいるわれわれの特性と思われるかもしれませんが、自動翻訳機もない中世の時代に、ポルトガル人やオランダ人と旺盛なコミュニケーションを交わしてきた先祖を思えば、対話は不可能でな

いように思えます。関ヶ原の合戦で西軍方に属した武将とその家来の多くが、東南アジアへ逃れて暮らしたとも伝えられます。われらの祖先は、英語教育が一般的になった今よりずっとインターナショナルであったかもしれない、むしろ対話を閉ざしているのは、われわれの固定観念ゆえなのかもしれません。

固定観念を壊し柔軟な発想へ導くといえ、宗教の一番です。難解な仏教思想を国境を越えて伝え翻訳してきた先達の歴史のうえに立ち、日本の伝統仏教僧侶のかたがたが、こんどは日本人ならではの美徳や感謝の精神を、海外の人たちへ伝えてゆく役割を担ってゆかれることを祈念します。

## 曾我量深講話録 全5巻



現代真宗教学の最高峰、曾我師が晩年、一般の人々に説いた教えを聞き書きし、雑誌「中道」に掲載された10年に亘る講話を初めて書籍化。  
四六判並製／定価各二九一六円

## 信仰についての対話 ①②



安田理深著  
真に「親鸞教学」と言いうる信念内容を曾我量深師から受け継ぎ、自己自身の思索で肉付けした安田理深師と老求道者の歴史的対話。  
四六判並製／定価各二六〇円

大法輪閣  
東京都渋谷区東2-5-36  
TEL 03-5466-1401 FAX 03-5466-1408  
〈価格税込〉送料210円